

はじめに

病棟は、パーキンソン病や神経難病、脳疾患による経口摂取が不可能な患者が多い。このような患者は唾液分泌低下により、細菌繁殖、誤嚥性肺炎のリスクが高くなるため、その予防として口腔ケアが重要視されている。現状は経管栄養・禁食の患者には、1日1回日勤で口腔ケアを実施していたが、ケアがいき届いておらず、ケア回数が不足しているのではないかと感じた。そこで、口腔ケア不足になる問題点として口腔内環境評価ツールの不在、スタッフ間でのケアの不統一、口腔ケアの実施回数不足が挙げられた。

以上のことから、OHAT (Oral Health Assessment Tool) を用いたケアフローチャートを作成・実施することにより口腔内環境の改善に取り組んだ。

研究期間・対象者

平成30年4月～12月 家族に同意を得た経管栄養及び禁食者：14名

方法

1. 口腔内環境評価ツールとして Chalmers により作成された OHAT を基に3病棟で改正し、8項目中の5項目を活用した。(図1)
2. 5項目を項目ごとに評価し点数記入を行う口腔内評価表を作成し活用した。

ORAL HEALTH ASSESSMENT TOOL 日本語版(OHAT-J) より抜粋 (Chalmers JM et al., 2005 を日本語訳)

ID:	氏名:	評価日:	スコア	
項目	0=健全	1=やや不良	2=病的	スコア
口唇	正常、湿潤、ピンク	乾燥、ひび割れ、口角の発赤	腫脹や腫痛、赤色斑、白色斑、潰瘍性出血、口角からの出血、潰瘍	
舌	正常、湿潤、ピンク	不整、亀裂、発赤、舌苔付着	赤色斑、白色斑、潰瘍、腫脹	
歯肉・粘膜	正常、湿潤、ピンク	乾燥、光沢、粗造、発赤、部分的な(1-6歯分)腫脹、義歯下の一部潰瘍	腫脹、出血(7歯分以上)、歯の動揺、潰瘍、白色斑、発赤、圧痛	
唾液	湿潤、粘性	乾燥、べたつく粘膜、少量の唾液、口渇感若干あり	赤く干からびた状態、唾液はほぼなし、粘性の高い唾液、口渇感あり	
口腔清掃	口腔清掃状態良好、食渣、歯石、プラークなし	1-2部位に食渣、歯石、プラークあり、若干口臭あり	多くの部位に食渣、歯石、プラークあり、強い口臭あり	
歯科受診 (要 不要)				再評価予定日 / /
合計				

日本語訳: 藤田保健衛生大学医学部歯科 松尾浩一郎, with permission by The Iowa Geriatric Education Center
available for download: <http://dentistryfujita-hu.jp/> revised Jan 15, 2016

図1

3. 口腔ケア回数・内容の決定をするケアフローチャートを作成した。(図2)
- 口腔内評価表(図3)の合計点数で1週間のケア回数・内容が決定しケアを実施した。
4. 看護師・介護士を対象としたアンケート調査を実施した。
5. 事前学習で評価方法、口腔ケアの手順、必要ケア物品などを学んだ。
6. 評価は週1回とし、14週間の評価を集計した。

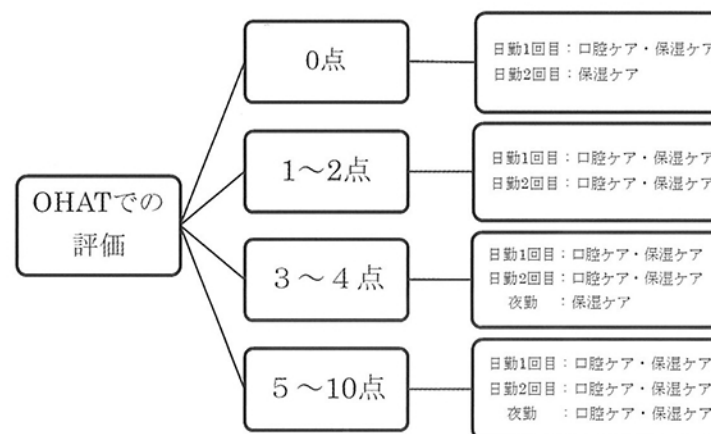


図2 ケアフローチャート

評価日									
口唇									
舌									
歯肉・粘膜									
唾液									
口腔清掃									
合計点									
3日の実行チェックシート									
評価者サイン									

図3 口腔内評価表

結果

開始時と終了時で口腔内環境の評価比較をした結果14名中、改善者9名、悪化者4名変化なし1名であった。スタッフアンケートより改善に繋がったと考えられる要因として次の4点が上がった。

- ・ケア時間の5分以上が0%から5%へ増加した。
- ・患者家族の協力でケア物品が揃いケアの充実が図れた。
- ・事前学習により口腔内観察ポイント・ケア物品の使用手法など新たに得た知識があった。
- ・口腔内評価表による回数の実施により口腔内環境の改善に繋がった。

一方で、口腔ケア実施については、終了時「必ず実施した」が44%低下し、実施できなかった理由として「時間がない」「忙しくて忘れた」など時間に関する理由が多数であった。

また、OHATの評価については、評価しにくい項目があり、それらが悪化した項目と合致したことから評価の難しさがあったと考えられる。OHAT及びフローチャートの継続については、したい・したくないがほぼ同数であり、意見として「効果はあった」「継続したいが時間的余裕がなく厳しい」「病棟で出来る方法で行いたい」などがあつた。

まとめ

口腔内の観察ポイントや口腔ジェルが必須物品であることを学び、ケアの統一が図られ、看護師・介護士の口腔ケアに対する意識向上にも繋がった研究であった。

しかし、今後も継続して行くためには、アンケート結果にあるようにケア時間の確保や病棟に合った方法の検討が必要である。